IS大戦～無限の宇宙(ソラ)に飛び立て乙女～再演版

帰ってきたクフフのナッポー

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

太正（たいしょう）から１００年過ぎた平盛（へいせい）の時代

男卑女尊のこの世界に１人の戦士が降り立った！

「俺は誰一人として犠牲にはしない！みんな必ず生きて帰るぞ！」

『了解！』

今、平盛の空に浪漫の嵐が巻き起こる！

前々から温めていたＩＳ×サクラ大戦のコラボ作品です。至らない点が多いかもしれませんが全力で頑張ります！

（注意事項！）

作者はサクラ大戦はプレイ経験はなく１～３の実況動画を見ただけで、ＩＳも原作の知識が薄れててうろ覚えな上アーキタイプ・ブレイカーは未プレイです

全体的に一夏と箒に対するアンチ要素が多いです

オリジナル要素や設定がいくつかあります

一夏ハーレムが無く、代わりに大神さんハーレムです

新サクラ大戦の詳細が発表される前に考えてたものなので、新サクラ大戦とはパラレル設定だと思ってください。

パスワードをド忘れしてアカウントを変えたのでこちらのアカウントで再投稿します。

目　次

プロローグ ―――――――――――――――― 1

プロローグ

時は太正。

日本の首都である帝都『東京』。その都市部から遠すぎず近すぎずといった距離にある家に一人の老人が住んでいた。

彼の名は大神一郎。

若かりし頃は帝国海軍の軍人を目指し士官学校を主席で卒業。その後、霊力と呼ばれる力を使い、帝都に住む人々の平和を脅かす異能の存在と戦う部隊『帝国華撃団』の隊長として後に最愛の妻となる女性『真宮寺さくら』をはじめとした仲間たちと共に戦った軍人であった。そして、平時は銀座にある『大帝国劇場』とそこで舞台を行う『帝国歌劇団』の支配人兼モギリとして老若男女問わず多くの人に慕われてきた。

かつての上官から華撃団を託されて数十年。現在は戦いから身を引き、帝都の平和とそこに住う人々の笑顔を守る使命は彼の意思を受け継ぐ者達へと託した。長らく共に過ごした妻は先立ち、子供も皆家を出てそれぞれの家庭を持つようになり、時折若い隊員などが助言を求め訪ねに来るが基本大神は1人静かな隠遁生活を送っていた。

「まだ帝都には怪人達による事件が起こるがそれでも俺達が若い時に比べて幾分か平和になったよ、さくらくん。ああ、それと今度の土日に子供達が来るんだ…」

隠居した大神は妻であるさくらの遺影を前に話をするのが習慣となっていた。新聞の記事やその日あった出来事などを話すと不思議となくなった妻が今も自分の側にいてくれると感じるからだ。

だが、その日は違った。

「大神くん…大神くん…」

大神がさくらに話しかけてると天から女性の声が聞こえた。そして大神にはその声の主が誰か心当たりがあった。

「この声、もしかしてあやめさん？」

藤枝あやめ

大神が海軍の士官学校を卒業して帝劇に配属されて1年目のとき

に出会い、その年にあった『葵叉丹(あおいさたん)』との戦いで命を落とすがその後天使ミカエルへと転生し自分達を見守ってくれている。
　そんな彼女の声が何故今聞こえたのか？気になった大神はあやめの声をもっと聞こうと家の庭に駆け出して空を仰ぐ。すると天から一筋の光が大神に目掛けて落ちてきた。
「なんだあの光は？こっちに落ちてくるぞ！」
　歳をとり心身ともに若い時に比べ衰えた大神は反応が遅れ、光を避けることができずに直撃した。
「ごめんなさい大神くん。でも未来を…霊力の技術が消えたも同然の未来で降魔の脅威から世界を救えるのは貴方だけなの…」
（あ…あやめさん…？）
　光に飲み込まれ意識が薄れていく中あやめの声が聞こえた。光が消えるとそこには大神の姿がなく静かに風が吹き抜けただけだった……
　後日劇場関係者が大神の自宅を訪ね、彼が失踪している事が発覚。警察と軍が日本中を探しても行方が分からず、彼は消息を絶った。

　だが、大神一郎は死んだわけではなかった。

「う…うーん…ここは？」
　頭がボンヤリとする中大神は目を覚ました。周囲を見るとどこかの病院の一室のようで部屋の中には自分が寝ていたベット以外にも他にもベットがあった。
（あやめさんの声が聞こえて庭に出た後は…駄目だ思い出せない。あの後意識が薄れていくのは感じたから多分そのまま倒れて誰かが病院に運んでくれ……あれ？）
　何故病院にいるのかを考えながら自分の頭に手を当てると大神はあることに気がついた。それは、自分の手が５歳児程度の大きさになっているのだった。手だけではない。頭のモヤがスッキリしてきた彼は改めて自分と周りの状況を理解することができた。
　自分の体を触って確認すると自分の体が５歳児ぐらいになってい

ることや、他のベットにいるのが皆が今の自分と同じぐらいの子供であること。そして極め付けが…

「一郎！アンタ熱は下がったのかい!?私やこの子が誰だか分かるかい？」

「あぁぁ、もう大丈夫だよ姉さん。新次郎も元気そうだね」

自分の歳の離れた実姉、大河改めて大神双葉が２０代ぐらいまで若返っていることだった。現在彼女は心配そうに赤ん坊を…大神の５歳年下の甥にして彼女の息子の大河　新次郎を抱っこしながらこちらを見ている。

彼女の話では大神は突然高熱を出して病院に緊急搬送されて三日間まるまる寝込んでいたらしい。

だが大神本人としては事の経緯なんてどうでもよかった。

彼にしてみれば自分と姉が若返っていることに大きく驚いているし、姉の両手に抱っこされている赤ん坊の甥を見て『新次郎は赤ん坊にまで若返ってる』などと思っていたりとでパニック状態であった。幸い、姉や医者からは熱が下がったばっかりだから判断能力が一時的に鈍っていると思われているようで不審に思われずにいた。そして彼にとって最も驚きだったのがカレンダーに書かれてある元号だった。

「姉さん。今の元号って太正だったけ？」

「何言ってるんだいアンタ？太正なんて１００年も前の時代じゃないか。今は平盛じゃないか。ほら、カレンダーだってそう書いてあるじゃないか」

双葉が指差したカレンダーには確かに平盛と書かれてあり、その事実が大神の頭にある事実を知らしめることになった。

（この時代は…俺が生きた時代より遥か先の未来だ！なんでか知らないが、俺は未来の俺に…この平盛の時代の大神一郎に転生したのか！）

呆然とする大神。

はたしてこの先彼に待ち構える運命はどうなるのか。それは誰にも分からない。